

# e-dream-s 通信

No. 103 発行：2009年10月11日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

10月号をお届けします。CamTESOL 2010 への準備状況、東京で行なわれたカンボジア事前学習会、報告会の様子、総会時に大阪でお会いした Sopha さんからメッセージが届いています。

## 目次

1. CamTESOL 2010 に参加します！	中川 房代	p. 2
2. 小人物の社会貢献	辻 荘一	p. 4
3. 久しぶりのアメリカ日記：八百屋の店先（2）ソルトレーク・シティ	井川 好二	p. 6
4. 映像のもつ力	塚本 美紀	p. 14
5. My Unforgettable Experiences with e-dream-s	Sopha Saran	p. 15
6. カンボジア事前学習報告	室山 佳子	p. 16
7. カンボジア・ツアー報告会	宮城 英和	p. 19



プノンペン王宮に咲くスイレン科の花（撮影：岡田かおる）

# CamTESOL 2010 に参加します！

中川 房代

来年2月27日～28日、カンボジアの首都プノンペンで、“One World: World Englishes”をテーマに、第6回 CamTESOL 2010 が開催される。現在、その大会に参加を予定しているのは6名。9月末、その大会での発表に向け、発表の概要を書いた応募用紙を送付した。去年は2本、今年は3本を発表し、そして来年も3本の発表を予定している。

私たちが応募した発表内容は以下の通り。(敬称略)

(1) "Breathe, one, two, three. - How to Produce English Sounds"

(Phonetic training for non-native teachers of English)

中川、岡田

(2) "Say It With Rhythm"

(Phonetic training for non-native teachers of English)

岡崎、河野

(3) "Reasons to Teach English"

(Initial Career Motivation of English Teachers)

井川、辻

(1)と(2)は、ACROSS の発音訓練に関わる内容で、(1)は CamTESOL 2009 で行った内容を元に、発声、口形、アルファベット、単語の発音をワークショップ形式で行う。(2)は、(1)の基礎発音訓練の次のステージで、詩などの教材を使ってリズムとイントネーションの練習を行うワークショップを予定している。(3)は、日本人、カンボジア人、アメリカ人の英語教師を対象に、「なぜ英語教師になったのか」というアンケート結果をまとめた発表である。今後、論議を続け、発表内容を具体化していく予定である。

それには、まず CamTESOL での発表に、私たちの応募が選考・採用されなければならない。近く審査が行われ、10月24日までに、私たちの元に採用通知が届くことになっている。

カンボジア・プロジェクト(英語教育奨学金)については、8月の会員総会で「できる範囲のところから、まず始めてみる」と、この秋にも具体案を出すことを方針とした。継続的に資料を集め、学習を進め、論議をしていきたい。

9月下旬に、大阪で理事を中心にカンボジアに関する学習会を開催した。井川顧問が準備して下さったカンボジアに関するビデオ資料を見て、カンボジア社会の現状、支援をしている組織・個人、またその支援の内容と方法などについて学習した。

その学習会で見たビデオの1つに、カンボジアの大学に通う女子学生のための寮を建設するという支援をしている人の話があった。カンボジア社会の発展のためには女性のリーダー育成がキーになって

いるが、大学の多いプノンペンなどの都市部には女性用の寮がない、という現状認識をもとにしていた。支援の方向、方法には様々あるが、最小限の投資で最大限の効果を上げるには？何を支援すれば、よりカンボジア社会・カンボジア人のためになるのか？をはっきりさせていくことが一番大切なのではないか？

私たちはカンボジアについて知る努力を続けていかなければならないし、私たちのできるプロジェクトの方向性についても、もっと活発に意見交換・論議をしていかなければならない。

# 小人物の社会貢献

辻 莊一

本当に政権交代してしまいましたね。なんだかお坊ちゃんぼくて頼りなげだった鳩山さんも、趨勢がはっきりして来た選挙終盤から、なんだか貫禄が出て来て、今はちゃんと首相に見えるから不思議です。

我が家では、政権交代でこれから日本はどうなるのか、などという高尚なことは話題に上らず、話すのはもっぱら高校無償化、子供手当給付のことばかりです。特に妻は「子供手当給付とか高校無償化なんて、今頃遅いんじゃない！」と怒り心頭であります。確かに、共働きで大学生の子供3人の我が家では、子供手当は給付されないし、扶養控除が廃止されたら税金は上がるので、いいことなんか1つありません。

悔しいので、少し調べてみました<sup>1</sup>。みなさんご参考に。

## ケース1

- ・給与所得者で中学生以下の子供2人を扶養
  - ・共働きで配偶者控除不適用
  - ・厚生年金に加入している
- その他の所得控除は考慮しない

## 算出年税額

年収 200 万円	年間税金増加額 + 30,200 円
年収 300 万円	年間税金増加額 + 38,000 円
年収 500 万円	年間税金増加額 + 65,100 円
年収 700 万円	年間税金増加額 + 135,600 円

結構税金が増えますが、子供手当二人分が年間 624,000 円ですから大変お得です。

## ケース2

- ・給与所得者で大学生1人とニート(28歳)1人の2人を扶養
  - ・共働きで配偶者控除不適用
  - ・厚生年金に加入している
- その他の所得控除は考慮しない

年収200万円	年間税金増加額 + 0円
年収300万円	年間税金増加額 + 8,800円
年収500万円	年間税金増加額 + 74,100円
年収700万円	年間税金増加額 + 191,100円

この場合子供手当は給付されないなので、上記金額を失うこととなります。ウチの場合はこれに近いですね。

私は子供は社会で育てようという姿勢は理解できますし、むしろ、その家庭にとっても日本社会にとってもそうあるべきであるという意見なんです。いざ自分たちが子供手当も貰えずに苦勞して子育てして来て、他人の

子供の為に税金が年間数十万円増えるとなると、ちょっと待てよと思ってしまうのだから、我ながら小人物であります。

オバマ大統領が国民皆保険問題で劣勢になっていると聞いて、みんなが保険医療を受けられるのがその個人にとっても社会にとってもいいに決まっているのに、少々税金が増えるからといって反対するなんてアメリカ人はバカじゃないのか、理解出来ない！などと思っていたのですが、この計算を見て、突然理解出来ました。

そんな小人物が、カンボジア支援で自腹を切って何度もカンボジアに行き、奨学金プログラムの為の資金も進んで出そうとも考えているのですから不思議なものです。

---

<sup>1</sup> ウェブサイト投資十八番 <http://stockkabusiki.blog90.fc2.com/blog-entry-866.html>

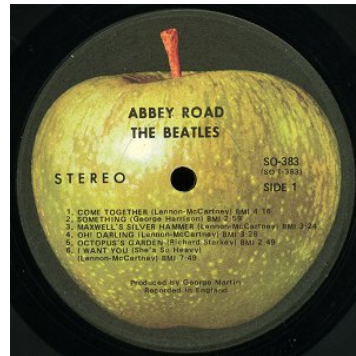
## 久しぶりのアメリカ日記：八百屋の店先（2）

### ソルトレーク・シティ

井川 好二



赤物の典型(?)紅玉<sup>2</sup>



西洋のりんごは青物(?)Apple Label<sup>3</sup>

司馬遼太郎が「ニューヨーク散歩<sup>4</sup>」の中で、マンハッタンの街角を行く雑多なアメリカ人たちを眺めて、「八百屋の店先のような多様性」と形容したのに刺激され、今夏のアメリカ旅行記を、現地で出会った人々の写真を交えて、フォトエッセイ風に綴るつもりで始めた「久しぶりのアメリカ日記」。シリーズの2回目である。

考えてみれば、アメリカの古くからの友人や現地で知り合った人々を、野菜や果物に例えるのは、まことに失礼な話ではある。しかし、多民族社会としてのアメリカの特徴を、伝えるがためのメタファーとしてご容赦いただきたい。誰の顔がカボチャで、誰がジャガイモ似と云うような話ではないのである。

ちなみに、国語辞典によると「八百屋」とは、「野菜類を売る店。また、その人。青物屋。青果商」（大辞泉）とあって、この野菜類と云うところがポイント。つまり、八百屋は野菜のみではなく果物なども商う。

また、野菜、特にキャベツや青梗菜などの「葉菜類<sup>5</sup>」を、「青物」と呼ぶが、英語の“Green Grocer”と云う呼び名に似ていて面白い。尤も、日本語の「青」の概念に、「緑」も含まれていることは、交

<sup>2</sup><http://100.yahoo.co.jp/detail/%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%B4/%EF%BC%BB%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%83%81%E3%83%A1%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%83%87%E3%83%BC%E3%82%BF%EF%BC%BD/>

<sup>3</sup> [http://home.q04.itscom.net/hiropon/label\\_apple.htm](http://home.q04.itscom.net/hiropon/label_apple.htm)

<sup>4</sup> 司馬遼太郎 (1994) 「街道をゆく 39：ニューヨーク散歩」 東京：朝日新聞社

<sup>5</sup> ようさい・るい【葉菜類】 主として葉を食用にする野菜類。ハクサイ・キャベツなど。葉野菜。【大辞泉】

通信号を思い出せばはっきりする。関西では、かつて果物を「赤物」と呼んだ。りんごや柿の赤だろう。しかし、西洋のりんごは、青かった・・・？

閑話休題。「久しぶりのアメリカ日記：八百屋の店先」の第1回目は、サンフランシスコのベイエリア<sup>6</sup>。出会った人々の何人かを紹介した。今回はユタ州ソルトレーク・シティ(SLC)<sup>7</sup>。ユタ州220万人の人口の8割以上にあたる、180万人が住んでいる地元きっての大都会。砂漠の中に造られた街。2005年の冬に仕事で始めて訪れて以来、2度目の訪問である。

● 8月6日(木)

ユナイテッド航空の国内線で、サンフランシスコからソルトレーク・シティに入る。約1時間半のフライト。4年ぶりである。

アメリカの空港で国内線を利用する際には、日本の空港で国際便に乗るより、遥かに厳しい持ち物チェックを通過しないといけない。2001年の9.11同時多発テロ事件<sup>8</sup>以来のことだが、乗客全員が靴まで脱がされるのには、うんざり。それに、一見効率的で、全く非効率なユナイテッド航空の「Easy Check-in」(セルフでチェックインするシステム)の不愉快さ。

こうした手続きの理不尽さに、まるで100年前にアメリカにやってきた移民にするような扱いかたと、ムツとするが、周りの白人アメリカ人も黒人アメリカ人も、みんなおとなしく我慢しているのを見ると、外国人としては仕方なし。しかし、今後、ソルトレークからニューヨーク。ニューヨークからサンフランシスコと乗り継がないといけない前途が、思いやられる。

---

<sup>6</sup> Bay Area: the region around San Francisco Bay, in north central California. Oakland is the hub of the East Bay, San Jose of the South Bay. (OAD)

<sup>7</sup> Salt Lake City: the capital of Utah, situated near the southeastern shores of the Great Salt Lake in the northern part of the state; pop. 181,743. Founded in 1847 by Brigham Young, the city is the world headquarters of the Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints (Mormons). (OAD)

<sup>8</sup> アメリカ同時多発テロ事件(アメリカどうじたはつテロじけん)は、2001年9月11日にアメリカ合衆国で発生した、航空機を使った4つのテロ事件の呼称である。航空機によるテロとしては未曾有(みぞう)の規模であり、全世界に衝撃を与えた。

<http://wkp.fresheye.com/wikipedia/%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%90%8C%E6%99%82%E5%A4%9A%E7%99%BA%E3%83%86%E3%83%AD%E4%BA%8B%E4%BB%B6>



航空機の激突で炎上するワールドトレードセンター<sup>9</sup>

サンフランシスコに比べると、ソルトレーク・シティは、非常に暑い。8月でも昼間はほとんどエアコン要らず、夜になると逆に暖房がうれしいサンフランシスコとは、大違い。

戸外は軽く30度以上あると思われるが、室内はエアコンが効いているので、問題なし。湿気がないので、蒸し蒸しというわけでもない。そういう意味では、日本の夏の方が、断然「暑い」のだろう。

とはいえ、日差しがきついので、車に乗るときには、サングラスが必要。仕事の都合で着ているサマースーツに、サングラスでは、やっぱり、マフィア風？あるいは、FBI。

● 8月7日(金)

テレビの天気予報によると、昨日夕方にあったサンドストーム<sup>10</sup>のおかげか、最高気温は、26度とのこと。ちなみに、サンフランシスコとは時差1時間。日本とは15時間違う。

Salt Lake Community College (SLCC)<sup>11</sup>の笠井先生と再会。笠井先生は、コンピュータ情報システム学科の教授で、私が2005年に初めてソルトレークへ出張して以来の友人である。山梨県甲府出身。40年以上前、奨学金を得て渡米。アメリカの大学、大学院を卒業し、以来大学で教鞭をとる日系アメリカ人である。

奥さんが、私の勤務校の卒業生であったり、以前の職場でアルバイトをしていただいたこともあったりと、奇遇が重なって親しくなった。爾来何回か帰国される度に、ACROSSのメンバーとも一緒に食事をする機会があって、すっかり旧知の間柄。

サンフランシスコへ留学されていたACROSSの山田さんも、ソルトレークを訪れてお世話になった。来年2月には、カンボジアで開かれる英語教育学会 CamTESOL2010<sup>12</sup>へも参加される。そんな笠井先

<sup>9</sup>[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:National\\_Park\\_Service\\_9-11\\_Statue\\_of\\_Liberty\\_and\\_WTC\\_fire.jpg](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:National_Park_Service_9-11_Statue_of_Liberty_and_WTC_fire.jpg)

<sup>10</sup> Dust storm, a storm caused by strong winds and blowing sand or dust

<sup>11</sup> <http://www.slcc.edu/>

<sup>12</sup> <http://www.camtesol.org/>



生とは、5月に大阪でお会いしているのです、まるで日本在住の友人のような親しさを感じる。仕事のことや、2月の学会のことなど、いろいろと話す。

昼食は、笠井先生の案内で、大学の近くにある韓国式豆腐チゲの店 “Myung-Ga Tofu House”<sup>13</sup>へ。石製の小鍋に豆腐チゲ<sup>14</sup>、ふっくら炊きあがったご飯と、白菜キムチ、キュウリキムチ、もやし、韓国海苔などの「豆腐チゲ定食」。キムチが新鮮。チゲ鍋のシャープな辛さが、程よく時差ぼけの頭に効いてくる。笠井家がよく利用する店とのこと。かなりイケるランチである。このヘルシーな豆腐チゲ、アメリカでは結構ブームらしく、いろいろな都市に専門店が増えている。

うっかり写真を撮るのを忘れたが、この Myung-Ga Tofu House は、家族でアメリカへ移住してきた韓国人家族の経営。息子は、ソルトレーク・コミュニティ・カレッジで学んだと云う。美味しい石焼チゲ鍋をバネに、アメリカ社会での定着を図る。韓国人のアメリカ社会での活躍には、東アジア人の一員として、大きな拍手を送りたい。



豆腐チゲ定食 (Photo by Koji Igawa, August 2009)

夕食は、ソルトレーク・シティ随一と評判のイタリアン。笠井先生ご夫妻に連れて行っていただく。ソルトレーク・コミュニティ・カレッジの調理学部の Bruce 教授のご紹介。自分もよくいくし、家族も大好き。オーナーシェフの指導の下で働くシェフは教え子とのこと。期待は高まる。そしてこの店が、大当たり。

CUCINA TOSCANA<sup>15</sup>、かなり広い店で、いわゆる「オオバコ」である。ちなみに、Cucina<sup>16</sup>は料理、Toscana<sup>17</sup>はイタリアの中西部トスカナ地方。

キッチンにもホールにも、何10人もの従業員が忙しく働いている。金曜の夜と云うこともあって、

<sup>13</sup> <http://www.urbanspoon.com/r/54/591476/restaurant/Redwood/Myung-Ga-Tofu-House->

<sup>14</sup> チゲ(朝鮮語 ch'igae 煮物の意)朝鮮料理で、唐辛子味の鍋物。肉・魚介類・豆腐などを入れる。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

<sup>15</sup> <http://www.cucina-toscana.com/pages/home.php#>

<sup>16</sup> cu·ci·na 【名】調理(法)。[ジーニアス英和大辞典 株式会社大修館書店]

<sup>17</sup> Tuscany |'tɜskənē| a region in west central Italy, on the Ligurian Sea; capital, Florence. Italian name Toscana. (OAD)

ほぼ満席状態。当日の電話でよく予約が取れたものだと感心する間もなく、数あるテーブルの中で、3番目にいいテーブルと思しい席に案内される。周りは、白人客ばかり。



美味しいイタリアンにご満悦の笠井先生ご夫妻 (photo by Koji Igawa, August 2009)

予約をとってくれた大学事務局の、私が「VIP」だとの大げさな触れ込みと、調理学部教授のコネのおかげである。ちなみに、No.1のテーブルには、二人連れの女性客。後でわかったことだが、オーナーの奥さんとその姪。2番目のテーブルには、高そうなワインをどんどん空けさせる常連4人組。

オーナーシェフの Valter は、第1テーブルと第2テーブルに付きっ切り。キッチンから運ばれて来る料理を、テーブル近くにセットした大き目の bus<sup>18</sup>の上で、入念に最終調整をしたり、切り分けたりしてから、客たちにサーブしている。

第3テーブルの私たちからも、この様子がよく見える。それで、せっかくメニューを見ながら、あれこれと注文したのにも関わらず、その料理がテーブルにやってくる前に、傍の bus で Valter が念入りに調整しているシーザーサラダだの、トリュフかけのパスタだのが、気になって、気になって、つい「あれ、食べたい」などと口走ってしまう。それを聞きつけた Valter は、さっそく調理してくれるし、ウェイターたちは、以前の注文を取り消してくれる。ソルトレーク・コミュニティー・カレッジ出身で、この店のキッチンを取り仕切る若手シェフ、ナジ氏も、わざわざテーブルまで挨拶に来た。ちなみに、ナジ氏は、ペルーからの移民。先住民であるインカ民族の末裔とか。

しかし、これは、VIP 待遇だ。関係者のみなさん、ありがとうございました。周りのお客さんたち、お騒がせして申し訳ありませんでした。

<sup>18</sup> bus (食堂で使う4輪の) 手押し車



*Cucina Toscana* のオーナーシェフと(Photo by Koji Igawa, August 2009)

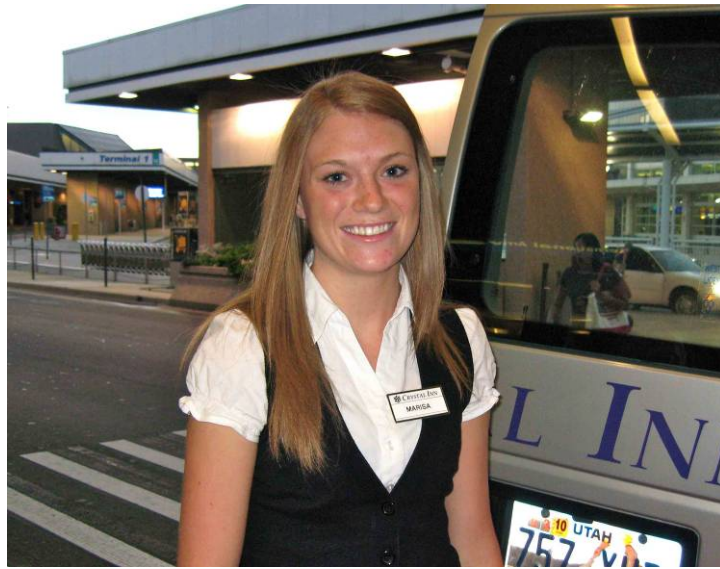
ほんとに美味しいイタリアンを食べ、美味しいワインをしこたま飲んで、イタリア人のオーナーシェフと写真を撮る。酔った勢いで、「この店は、ソルトレーク・シティでNo.1 と云う評判だが、私は、全米1のイタリア料理店だと思う」と、持ちあげると、普段は気難しそうに見える Valter も、にっこり。何枚もの写真撮影に応じてくれた。英語のそれほど得意でない彼は、おそらくイタリア系アメリカ人1世。ここまでやって来るのは、並大抵の努力ではなかったろう。

それを見ていた Valter の奥さんが、この写真、後で店に送ってと云う。引き延ばして店に展示してくれるそうだ。

● 8月8日(土)

土曜日の朝早く、ソルトレーク・シティ郊外のホテルを起つ。8:10のフライトなのに、まだ暗いうちにチェックアウトして、ホテルのシャトルバンで、6:30過ぎには空港に到着。長い手続きを終わっても、まだ1時間以上も待ち時間がある。今回のアメリカ出張は、時差ぼけに寝不足が重なり、相当眠くなる出張であった。

ホテルからシャトルで送ってくれたのは、20代前半の白人女性、メリッサ。運転手のユニフォームが粹に見える、ちょっとした美形。私の重たいスーツケースを、その華奢な手でシャトルのトランクに乗せてくれる。



ホテルのシャトルバンのドライバー (Photo by Koji Igawa, August 2009)

ちなみに、私のスーツケースは、ほんとに重くて、その後、デルタ航空のチェックインカウンターで、5ポンド(約3キロ)オーバーと云われ、なんとカウンター前でケースを開き、余分な荷物を手荷物に切り替えてことなきを得る運命が待っていたのであるが・・・

朝早いため、客は私一人。座れと云われて助手席に乗るが、黙っていると、何となく落ち着かない。で、眠気を払って、話始める。聞けば、メリッサは今回の私の出張先の一つであった、ソルトレーク・コミュニティ・カレッジの看護学科で学び、9月から看護師として働くのだそうで、ホテルの仕事はバイト。この空前の不況下にあっても、看護師への求人が潤沢にあるのは、日本と同じと云える。メリッサに、「ありがとう」とチップを渡し、「Good Luck」と握手をして、さあ出発。

毎日車で通勤していると、本を読む時間が、以前に比べて随分少なくなっているように思う。そのかわりと云う訳でもないが、ラジオをよく聞くようになったし、かけるCDも音楽ばかりではなく、講演、時事解説、落語、漫才などと、お話ものが増えているように思う。それで、活字不足が補われているとも思えないが、気は心。

そんな風に時々聞いているのが、司馬遼太郎の講演CDの一つ、「司馬遼太郎が語る(第3集)草原からのメッセージ<sup>19</sup>」。司馬は、その中で紀元前の遊牧民スキタイ<sup>20</sup>のライフスタイルを克明に観察したギリシャの歴史家ヘロドトス<sup>21</sup>や、中国で歴史書「史記」を著した司馬遷<sup>22</sup>を引き合いにだしながら、

<sup>19</sup> 新潮CD [1CD] 63分 ISBN 978-4-10-830170-2 (2005/09/26) (1992年千葉市文化センターにて収録)

<sup>20</sup> スキタイ【Skythai】前7世紀から前3世紀まで、黒海北岸の草原地帯に強大な遊牧国家を建設したイラン系の遊牧民族。武器や車馬具を発達させ、動物意匠を愛好した。その文化はユーラシア内陸地帯に広く伝わり、中国などの美術に大きな影響を与えた。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

<sup>21</sup> ヘロドトス【Herodotos】前5世紀ギリシアの史家。小アジア生れ。諸方を遊歴。著書「歴史」でペルシア戦争を中心に東方諸国の歴史・伝説、アテナイやスパルタなどの歴史を叙述。「歴史の父」と呼ばれる。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

<sup>22</sup> しばせん【司馬遷】前漢の歴史家。字は子長。陝西夏陽の人。武帝の時、父談の職を継いで太史令となり、自ら太史公と称した。李陵が匈奴に降ったのを弁護して宮刑に処せられたため発憤したと伝え、父の志をついで「史記」130巻を完成した。(前145頃～前86頃) [株式会社岩波書店 広辞苑

歴史家と歴史研究者の違いを語る。

「歴史家」というのは、どうも、歩いたり観察したりしなけりゃいけないものらしいですな。家の中で本を見ていたり大学に通ったりすることで歴史は成立するものじゃなさそうで、歩いて、歩いて、ものを見て、することが基本のようです。

「草原からのメッセージ」は、司馬遼太郎の講演を活字にした「司馬遼太郎全講演」の第三巻（1990-1995<sup>23</sup>）にも、収録されているが、上記の箇所は活字では、「やっぱり歴史家というのは、歩いたり観察したりしなきゃいけないものらしいですな」（p. 256）となって、あっさりしすぎて物足りない。

歴史家を目指している訳ではないが、街を歩くこと、観察することが、ものを書くことの基本だと云う考えには全く同感。司馬も「街道をゆく」シリーズがライフワークといろいろな「街道」を歩き、観察を怠らず、文章を書いた。及ばずとも、その作法に習おうとするのは、蓋しこっちの自由であろう。

次回は、いよいよニューヨークへ！ （Friday, October 9, 2009）

# 映像のもつ力

塚本美紀

9月のある晴れた日の午後、プノンペンで英語学校を経営しているサンボとスカイプで話をした。授業でテレビ会議を行う方法について、詳しく教えて欲しいとメールがあったからだ。PCを立ち上げ、スカイプを起動し、サンボのアカウントにコールする。彼とは今年の7月からメールのやり取りをしているが、一度も会ったことはない。今年の夏にプノンペンを訪問した際、彼の学校を見学させていただいたものの、その時彼は会議に出席するためデンマークに行っていたからだ。サンボが私からのコールに答えると、見知らぬ青年の顔があった。今まで何度もメールのやり取りをしていたが、実際に顔を見るのは初めてだ。けれども顔を見ながら話すほうが、ずっと話がはずむ。

そういえば、先日、CamTESOLのペーパーの書き直しについて話し合うため、ブライアンとスカイプで話した。彼とは、実際に会ったことも、電話で話したことも、メールのやり取りをしたこともたくさんあるが、やっぱり顔を見ながら話すのは、電話よりもずっと話しやすい。その次に話し合いをしなければならぬ時も、迷わず電話でなくスカイプを選んだ。もちろん、膝を突き合わせて話ができるに越したことはないが、そうそう福岡から大阪に出てくるわけにはいかない。そんな時、スカイプはなんと便利なツールだろうかと思う。

サンボは、プノンペンにもう一つ英語学校を作る計画を進めているという。そこにはPCとインターネットを設置できるので、テレビ会議を授業に取り入れることを検討したいという。私のこれまでやってきたことを紹介しながら、いろんな方法について話し合った。とりあえずは、サンボが私の学校の生徒にカンボジアのことについて話をしてくれることになった。そして、新しい学校ができたら、私もサンボの学校の生徒たちに日本のことについて話をする予定だ。

話している途中、カメラの向きを直そうとしたとき、偶然カメラが動き、教室の中を一通り映すことになった。何かほかのことを話していたのに、サンボが突然、「わー、すごい教室だね。設備が整ってる！生徒は何人入れるの？君はいつもその教室で教えてるの？」と矢継ぎ早に質問が飛んできた。生徒が自由に調べ物ができるようにと数台のPCを備え付けにしている教室だが、他にそんなに立派な設備がある部屋ではない。もちろん、その教室は特別教室で、一般の教室ではない。彼は、私と話したいろんなことよりも、偶然見えた教室の様子が一番印象に残ったみたいで、「今日は、教室を見せてくれてありがとう！勉強になったよ。」と言って、スカイプでの話を終えた。

映像が伝えるものは大きい。日本とカンボジアのそれぞれの生徒が、お互いの映像を通して学び合う日に向けて、準備を進めていきたいと思う。

# My Unforgettable Experiences with e-dream-s

Sopha Saran

I would like to thank the e-dream-s members for giving me such an opportunity to be part of the organisation. It was my great pleasure to be invited to give lectures on the culture and education of my country – something that every Cambodian student would be more than pleased to do. I was so impressed by everyone's attention and interest in the presentations, both the Tokyo presentation which I did alone and the Osaka presentation on which I and Sokhom worked together. I did wish we could have had more time during the last presentation, so that we could give more explanation on each parts of the speech.

Another good experience I have learnt from the Osaka trip was being able to see how a Japanese organisation runs and how people works. It was really overwhelming to see the commitment and effort every member put into helping other countries, one of which is Cambodia. I really wish that all Cambodians had that same spirit, instead of the selfishness. I will share this experience with my fellow Cambodian friends – who are studying in Japan – as to instil in them the spirit of helping others as well as to encourage them to keep working on their charity projects.

Last but not least, I would like to thank all the members for their warm welcome, hospitality, kindness and friendliness. Although it was my first time, I felt as if I had known everyone for ages. I hope to have more chances to work with e-dream-s as to contribute as much as I can in gratitude to what the organisation has done for my beloved country and other developing countries.

# カンボジア事前学習報告

室山 佳子

8月1日、東京池袋にて、カンボジアツアー2009に向けて事前学習会が行われた。はじめに、中川さんから「カンボジア・プロジェクト」についてと旅程の説明が行われ、次に、日本の奨学金で現在一橋大学に留学中のソパさん(SARAN Sopha)から、「カンボジアの教育と学校生活」と「カンボジアの文化」についてお話しいただいた。出席者は、大阪から中川さん、東京から佐藤さん、岡田さん、新谷さん、岡本さん、高萩さん、鈴木さん、私の8名であった。

ここでは、ソパさんのプレゼンについて報告したい。まず、「カンボジアの教育と学校生活」についてまとめたい。

## 1 教育制度

- ・教育は義務だが、OBLIGATIONではなく、DUTYであり、実際には学校に行けない子供たちがいる。
- ・小学校5年、中学校3年、高校4年の12年制。
- ・カリキュラムは教育省(Ministry of Education, Youth and Sport)により定められている。

## 2 公立学校

- ・月曜から土曜で、2交替制。午前は7時から11時。午後は1時から5時。
- ・小学校は最低でも40人。中学・高校は60人。
- ・英語は中学校から。外国語学習は重きを置かれていない。
- ・3つのP(Presentation, Practice, Production)がない。
- ・理論のみで実験は行われない。コンピュータの授業もない。

## 3 私立学校

- ・半日ではなく全日。午前クメール語、午後英語。または午前英語、午後クメール語。
- ・クラスサイズが小さい。 ・英語学習の時間が多い。生徒は英語を使うことを奨励される。
- ・3つのP(Presentation, Practice, Production)がある。
- ・施設設備が充実。

## 4 高等教育

- ・公立大学15、私立大学26。
- ・入学試験はなし。成績次第。
- ・大学は私立より公立のほうが競争率が高く、カリキュラムも充実。

## 5 英語教育

- ・英語学校が盛ん。英語の幼稚園もある。
- ・生徒たちは練習する機会を求め、親たちも英語で会話することに熱心。
- ・ACEは2番目に有名な英語学校。認可されており、資格を持つ先生が英語で教えている。
- ・英語学習に熱心な理由：専門職の機会、生き残りのカギ、知識を広げる、国際化。



## 6 結論

- ・初等・中等教育では公立より私立。
- ・高等教育では私立より公立。
- ・英語はますます盛んになる。

次に、「カンボジアの文化」である。カンボジアの一般的なアウトラインに加え、女性からの視点で文化が語られていた。

### 1 カンボジアの概略

- ・言語 クメール語
- ・宗教 仏教
- ・人口 1 4 0 0 万人
- ・民族 クメール人、ベトナム人、中国人、その他
- ・首都 プノンペン
- ・面積 1 8 万平方キロメートル
- ・隣接国 ラオス、タイ、ベトナム

### 2 挨拶(Sompeah と呼ばれるもの)

両手をハスの花のように胸の前で合わせ、頭を下げる。敬意の表し方により、手の位置は5段階に分かれ、胸の前から徐々に上げていく。神や神聖なものに祈る時は額の位置まで上げる。

### 3 生活

- (1) 出産：女性の人生で最も献身的かつ危険な経験になる。出産前後はタブーの食べ物があり、伝統的な規範に従わなければならない。
- (2) 葬儀：人は死ぬと火葬され、寺院の塔に安置されるか、散骨される。
- (3) 結婚：結婚は2家族の結びつきである。結婚年齢は以前に比べ上がって来ている。  
(男性 19～25才→25～40才。女性 16～21才→22～30才。)  
結婚式は2日間伝統に従って行われる。
- (4) 離婚：離婚した人は非難の目で見られる。小さい子どもは母親の保護下に置かれ、経済的には両親で子育て・教育に当たる。女性の再婚はかなり難しい。
- (5) 家庭：年長者に敬意が払われる。ほとんどが大家族だが、核家族も増えている。夫は一家の稼ぎ手、妻は主婦。財布のひもは妻が握っている。
- (6) 一般的習慣：長に対して高い価値を置く。ふさわしい挨拶が求められる。日の出前に起床する。平静さを保つ。しゃべりすぎず、話をよく聞く。('Talk less and listen more.') 両手で物を差し出し、受け取る。
- (7) 日本との違い：カンボジアはコミュニティーが小さく、誰とでも知り合いであり、人と会えば誰にでもにっこりする。日本の大都市では、人口が多すぎ、知っている人としか挨拶をしない。知らない人にはそっぽを向く。

実際にカンボジアを訪れてみると、プノンペンの ACE では、朝7：45から授業が始まり、90分集中して勉強。英語学習が盛んなことが手に取るように分かった。トゥクトゥクの運転手やマーケ

ットの店員も片言の英語は必須である。戦争博物館やトンレサップ湖の案内人もすらすらと英語で説明をしてくれた。

物売りの子供も片言の英語で盛んに声をかけてくるが、この子たちは今学校へ行く時間ではないのか、はたまた1日学校へはいけないのか、など疑問がわいてくる。物を売っているのはまだましなほうで、貧しい身なりで物乞いに来る子供たちもいた。

レストランやホテルでは、**Sompeah** で迎えられ、ぎこちないが手をあわせて挨拶を返すと、にっこりと微笑み返してくれた。

ソパさんは'Talk less and listen more.'と言っているが、ACE 校長 Louise が言うように、私が出会ったカンボジア人は'natural speaker'であった。

# カンボジア・ツアー報告会

宮城英和

日時：2009年9月20日（日）午後1時～午後2時

場所：成城学校

報告者：中川房代、岡田かおる、室山佳子、岡本小枝、按田志貴子

出席者：辻莊一、藤澤俊之、須賀幸恵、中松和子、鈴木栄子、宮城英和

まずは中川さんからカンボジア・プロジェクトを始めるにあたってのこれまでのいきさつが手短かに報告された。アジア・ツアーや ECAP のように人と人との出会い、繋がりから生まれたと。その後、今回訪れた首都のプノンペンとシェムリアップの2つの英会話学校や町の様子などが具体的に報告されていった。

岡本さんは ACE (Australian Centre for Education) プノンペン校についての報告。学校の教室や職員室やコンピュータールームなどの施設と授業風景が紹介された。1クラス18名で、年齢層は16歳から60歳までと幅広い。英語の勉強がしやすい環境にあること、授業が少人数のグループに分かれて、熱心に勉強に取り組んでいるようだ。すべて授業は英語で行われ、ハイレベルな印象であった。

岡田さんの報告はプノンペンの英語学校 CWF (Conversation With Foreigners) についてであった。あいにく日曜日のために授業は見学できなかったが、スタッフが校舎を案内し、いろいろと説明してくれたという。設備や教室の様子などは ACE にくらべ、質素な感じだが、生徒数が600人もいるというのは驚きだ。生徒の年齢層は15歳～24歳。教えているのは20人ほどのボランティアの外国人であるという。そして、CWF の利益がカンボジアの農村開発チームを支援するために使われていること、さらにオーストラリア政府から支援を受けていることなどが紹介された。

按田さんはプノンペンの町の様子や人々の生活の一端を報告した。プノンペンの足になっているトゥクトゥクなる乗り物。最初は安全なのか不安だったが、乗ってみるとなかなか快適だそう。そして、王宮、シルバーパコダへ入ったときの服装チェックの厳しかったことや、色とりどりの野菜や強烈な臭いを放つ魚がならぶオールド・マーケットの様子などが楽しそうに紹介された。

最後に、室山さによって観光スポットが紹介された。まずは世界遺産でもあるアンコールワット。入場の際の証明写真付チケットとはおもしろい。僧院が巨大な根に巻きつかれている光景はいつかテレビでみたことがある。遺跡は大丈夫なのか心配になる。続いて、トンレサップ湖クルーズ。ガイドさんの英語がすばらしいというのが印象にのこった。ポルポト時代の闇を告発する戦争博物館。そこでの地雷によって左腕を失ったガイドさんの話など興味は尽きなかった。

それぞれの報告に、今回のツアーが、関係者の人たちとさらに友好関係深めるのに有意義であったこと、そして、カンボジアの人たちの英語習得に対する熱意が感じられた。

#### 編集後記

11月に修学旅行で長崎に行くので、生徒に事前学習として班で調べたことを「総合的な学習の時間」にパワーポイントを用いて発表してもらった。どの班も写真を取り入れた発表だった。言葉で上手に説明することも必要だが、写真はそれだけで強い印象を与えてくれ、自分がそれを一緒に体験している気分になる。8月のカンボジア・ツアー報告会を東京でも行なった。これまでのカンボジアでの **e-dream-s** としての経験を多くの会員で共有し、カンボジア・プロジェクトの成功につなげていきたい。